スピノーザに於けるアントロポロギーの要求（承前）

篁　實

四

スピノーザに於て神は本來普通にそれの意味するところのものであつてはならぬ。人格神はスピノーザの峻拒するところのものである。人はスピノーザ哲學の端初が神、自然、實體の三位一體を以て始まることを想起するであらう。神の十全性は自然のそれ、神の不可分性は自然の全體性に於けるそれであり、神の叡知は自然の法則に外ならぬ。神の慈惠は自然の諧調と內的適應である。「自身の中にあり且自身に依て理解せられるもの、或は永遠無限なる本質を表示せる實體の屬性卽ち自由なる原因として考へられる限りに於て」自然は神である。之に對して「神の本性或は神の屬性の必然性から生ずる一切のもの卽ち神の中にあり、神なくばあり且理解せられ得ぬものとして觀察せられる限りに於ける」自然は又神の屬性の總ての樣態と解せられる。前者に於ては自然は natura naturans として、後者に於ては自然は natura

naturata として理解せられる。㊀ 云ふまでもなく、かゝる區別は單に論理的區別に過ぎず、あるものは自己原因として、無制限でありそれ自らに依て說明せられ理解せられねばならぬ一にして同一なる全體的自然のみである。かゝる自然は眞實に卽ち知性の外に (realiter sive extra intellectum)、實在的に (in re) 嚴存する無限の多樣性の統一的總體に外ならぬ。かゝる自然は、それ故に人間の理性的法則に依て構成せられるものではなく、却て人間に法則を規定するところの、人間自身それの微小部分たるところの全體的自然である。自然は樣態の體系 (System) であると謂ふことができるであらう。スピノーザに據れば「必然に且無限に存在する各樣態は、神の屬性の無制限なる本性からか、或は自然に且無限に存在する變狀に依て變容した屬性から必然に起らねばならぬ。」㊁ 神の屬性の無制限なる本性から直接に起りうるものは、擴りに於ては運動及靜止、思惟に於ては絕對的無限知性であり、これらは直接無限樣態と呼ばれる。之に對し必然にして永遠無限なる變狀の媒介に由て起る永遠無限樣態は間接無限樣態と呼ばれるのであり、無限に變易しつゝも而も常に同一として止まる全宇宙の形貌 facies totius universi 及び現實的無限知性はその例をなす。畢竟無限樣態は「統一の側から觀て屬性たるものが、その限定の多樣なる存立の總體として」觀られ

たものであると謂ふことができる。(三) 然るにかくの如く神的因果の無限必然性から從ひ來るところの、神の中にある限りに於ける所產的自然は現實的個物の世界とは云ひ得ない。無限なるものからは唯無限なるものが生ずるのみである。有限は制限であり、それは存在の部分的否定に外ならぬとすれば有限物は同種類の或る他のもの卽ち同一屬性內に於ける同樣に制限せられたる或るものに依てのみ與へられることをうるのみである。それ故にそれに制限を與へる同種類の他のものが存在せぬ限り、有限なる事物は存在し得ぬのであり、而してこの他のものも又再び同一法則に從屬するのであり、かくして無限に(in infinitum)進み際限がないであらう。これスピノーザが自然の普遍的次序(communes ordo naturae)と呼ぶところのものであり、無限樣態の次序の必然的、永遠、實在的なるに反し、有限樣態の次序として偶然的、時空的、可變的個物の假象界である。(四) 前者を支配するものは實體の因果であり、それは本質の演繹、本質に內屬する數學的必然性であり、論理的可能の無限としてロゴスの支配である。之に反して後者を支配するものは外的因果であり、無始無終に結果を限定する物理的力である。併し固よりこれらの區別は二つの自然領域の成立を意味するものではなくして、轉變生滅の有限界を永遠不變の秩序界の假幻に貶下すること

に依て、數學的必然の平面的永遠の獨立的絶對性を宣揚せんとするスピノーザ哲學の一面に外ならぬ。茲に人は疑ひもなくスピノーザの自然概念の形而上學的抽象性をみるであらう。自然は未だ神學的ベールに依て蔽はれてゐる。而してスピノーザに於ける自然概念のかゝる形而上學的性格を默殺しようとするならば、人はスピノチスムスをその矛盾に於て把握することをせずして、理解の一義的半端性を牽强附會するを免れ得ぬであらう。

然しながら、かくの如く現象界の豐富なる内容を奪ひ、之にかすに虚僞の假現を以てすることは自然の福音、世界歡喜と自然への依據の意識に滲洗するスピノーザの果して堪へうるところのものであつたらうか。今や、スピノーザ哲學の含蓄する具體的眞理の理解は飜つて彼の認識論へと再び目を轉ずることに依て始められねばならぬ。

「予は觀念のもとに精神が思考するものである故に精神が形成する精神の概念を理解する。」而してこの際「予が知覺よりも寧ろ概念と云ふのは、知覺なる語は精神が對象から働を受けることを示すやうにみえるのに對し、概念は精神の働を表はすやうにみえるからである。」[五]と定義せられるとき、スピノチスムスは含意的に觀念論に

外ならぬのでないかと考へられるのは故なきことでない。況して屬性を定義して「それ自身に依て存在し且それ自身を通じて（through）思考せられるものである。」と云はれるとき、そこにスピノチスムスを觀念論へと驅使する一の强力なる流れを汲み取らうとするのは正當である。何となれば思惟を「通じて」のみ、或るものが「思考」せられるからであり、延長は延長を思考することを得ぬ。即ち後者はそれの概念的領域のためには前者に俟たねばならず、從て（かゝる定義に從へば）それは何等の屬性でもあり得ず、かくして思惟の原理だけが—res cogitans—實體と一致するが故である。然しながら、他面、神が »res cogitans« なると共に »res extensa« として規定せられたと云ふことは、假令之を以て直に物質を實體の祕密となし「物質は思惟する」との唯物論的命題を立しうべくもないとするも、少くとも物質概念の新たなる意味發見を敎唆するものと謂はねばならぬであらう。縱し、それは形而上學的抽象性に於けるものに外ならなかつたとは云へ、スピノーザ自身物質が何故神的性質に價すべからざるものなるかの理由を發見し得ぬことを述べてゐる。[六] 從て又スピノーザの認識論に於て、身體性（Leiblichkeit）が看過すべからざる重要なる契機をなすことを推測するに難くないであらう。シェラアーの說くが如く果してスピノーザに於て身體及その

感觸は理性に對する反抗力であり、"Kerker der Seele" であるとしてのみ貶辱せられていゝであらうか。(七) スピノーザに據れば、理性の本質は精神が明白分明に認識する限りこの精神であり、精神の本質は身體の現實的存在を肯定することにある。從て身體の現實的存在を肯定することは理性の本質に外ならず、それは自性維持の努力であり、德の唯一の基礎をなすものでなければならぬ。人間の現實的本質は身體の現實的存在肯定の恒性に外ならぬ。(八) それ故に又精神が身體或はその部分に就て一層多くの實在を包含するものを肯定すればする程、精神は一層大なる完全に移るものと謂はねばならぬ。觀念の價値と現實的思考力とは對象の價値に從て評價せられねばならず、觀念の相違、觀念の價値の優劣、精神の能、不能等は總て人間の身體の性質の認識に依存するものと謂はねばならぬ。人間精神が凡ゆる他の自然的諸事物に比して有する優越點は、それの對象卽ち身體の優越性に負ふものに外ならぬ。かくして又甚だ多くのことを爲しうる身體を有する人間は、その最大の部分が永遠なる精神を有すると謂はねばならぬであらう。(九) 人間の精神を形成する觀念の對象は身體或は現實に存在する擴りの或る樣態であつて他の何物でもなく、而も人間の精神は身體の受ける感觸の觀念に依てのみ身體を認識し且それが存在することを知

り、又一切の外部の形體を現實に存在するものとして知覺する。精神の自意識と雖もこの身體の感觸の觀念を知覺する限りに於てのみ可能なのである。㊥ 換言すれば人間は身體に於て自己自身を見出す。かくして、寧ろ逆に、疑ひもなくスピノーザに於ては常に身體が第一のものであり、スピノーザ自身、身心の關係の妥當なる認識は身體の妥當なる認識を得て始めて可能なることを述べてゐる。身體がそれの與へられた條件として精神を指導すると云ふ考は、假令形而上學的思想に依て蔽はれたかの如くみえるとは云へ而も決してスピノーザの思想の中に於て跡を絶たなかつたところの先入見である。㊦ 思惟の樣態はかくて單なる延長の樣態に過ぎなくなり、人は唯物論の門前にスピノーザを見出すであらう。とは云へ、然しながらスピノーザの特色ある思想は本來觀念論、唯物論の何れをも意味せずして、そこから不可避的にそれらの何れへも接しうる一の不安定なる安定の中に自己を維持するところにあると謂はねばならぬ。

短論文の中に於て知覺するものと知覺せられたものとの間の媒介物として動精(Animal Spirits)が考へられてゐることは周知のことである。云ふ迄もなく、かゝる想定が運動と思考との間に何等の通路をも認めぬスピノーザの根本思想と調和しう

るものでなく、從て「エティカ」第五部序言に於て之が排斥せられてゐるのは當然である。併しそれにも拘らず、その痕跡が彼の思想の中に歴然たるを否定し得ない。卽ち觀念の最初の最低段階なる像(Images)が如何にして得られるかを次の如くにして語る。「若し、外部の形體が人間の身體の流動部を、之が屢々軟部をつくやうに決定するならば軟部の表面は變化し、かくしてそれから流動部が以前に起るを常とせるものとは異つた仕方に於てそこから彈き返ることが生ずる。」[十七] 流動部のこの新しい狀態はそれに伴ふ特殊な觀念を有してゐる。これらの觀念は像と呼ばれるのである。感性的表象(Imagination)とは自發的像(Spontaneous Images)に外ならぬ。「猶普通用ふる語を保存するために、その觀念が外部の形體を恰かもそれが現實に存在するかの如くに現示する人間の身體の感觸は、物の形態を再現しないけれども、それを表象像と呼び度い。又若し、精神が形體をかゝる仕方に於て觀察するならば、精神が形體を表象すると云ひ度い。」[十八] スピノーザが第一種の認識と呼ぶものはかゝる表象に外ならぬのであり、之は又誤謬の唯一の原因であるとせられる。不確實なる經驗に依る認識、記號に依る物の觀察はこの種の認識に外ならぬのである。第一種の認識の非妥當にして困亂せる所以は、それが多樣であり異種的內容からでき上つてゐると云ふ

ことである。それ故に妥當にして明白なる認識は、單純にして一般的なる述語の觀念に於て求められねばならぬ。スピノーザに據れば、總ての形體は或る點に於て互に一致しなければならぬ。從て吾々の身體及他の總ての身體に共通であり、又等しく部分並に全體の中にあるところのものはそれの相互作用に於ては常に又何處でも全く現在でなければならぬ。それ故にそれの觀念は決して追加せられることができず、凡ゆる經驗に於て同一の活々しさを以て繰り返されうるのみであり、從て妥當とのみ考へられる。これから又身體が他の形體と共通に有するものが一層多くなるに從て、多くのものを妥當に知覺する精神の能力が益々大なのである。一般概念(notiones communes)と呼ばれるところのものはかゝるものに外ならず、かゝる一般概念及妥當なる觀念を有することから物を觀察する樣式が理性であり、第二種認識に外ならぬ。併しスピノーザは尙この思辨の立場に止まり得ずして更に第三の立場へとすゝむ。之は第二種認識と同樣に明晰にして妥當であり、事物をその必然性の姿に於て觀破する人間認識の最高段階である。乍然之は第二種認識とそれの對象の相違卽ち一般概念に依て吾々に與へられる對象は、凡ゆる事物の切り離されたる共通的性質であり、從て一般に凡ゆる事物に本質的であるが、併し特殊な如何な

るものゝ本質でもないのに對し、直觀知の對象は凡ゆる特殊を自己の中に含むところの個物の本質でなければならぬことに依て、又それが直接的知識なることに於て卽ち第二種認識の比量的、間接的知識なるに對し、あるものゝ直觀的知識なることに依て區別せられる。卽ちそれは神の或る屬性の形式的本質の妥當なる觀念から物の本質の妥當なる認識へとすゝむものである。

然らばかゝる認識の三段階相互の內面的構造聯關は如何に理解せらるべきであらうか。スピノーザの認識論に於て、身體性が重要なる契機をなすことは既に述べた如くである。身體の感觸は表象に、身體の共通的特色は理性知に對應せしめられる。直觀知の對應は身體の本質である。何となれば精神はそれが身體の本質を永遠の相の下で包含する限り、永遠であり又その限りに於てのみ總てのものを永遠の相の下で認識する。而して直觀知は精神自身が永遠なる限り、形式的原因として精神に依屬するものなるが故である。(四) 理性知の立場に於て既に直觀知の立場に於けると類似せる或るものが取り扱はれてゐるのも、理性知の身體的特質が又直觀知の身體的特質の中に含まれうるものなるが故に外ならぬ。一般概念より峻別せられる所謂超越的言辭 (termini transcendentales) や普遍概念 (notiones universalis) が最も紛亂

せる觀念を示すものとして卻けられ、その理由が人間の身體的有限性に歸せられてゐるのは注意せられねばならぬ。(注) 身體性はスピノーザに於て現實性の原理である。人はこの際如上の示唆に從て、認識の三段階相互聯關の理解は感性的表象の基礎的制約性にかゝつてゐるのでないかと疑ひうるであらう。スピノーザに據れば、大腦の變化に伴ふ觀念は「その身體の感觸の觀念」と呼ばれ、身體の感觸は「觀念の對象」と呼ばれる。この際觀念に於て (in) 身體の感觸について (of) 思考するのか、それとも身體の感觸から (from) 觀念へすゝむのであるかと問はれうるであらう。併し之に對して»from«と»of«との同一視こそスピノーザに於ては卻けらるべき混同ではなくして、却て許さるべき前提であると謂はねばならぬ。然るに又、身體は甚だ多くの甚だ複合せる個體から組織せられてゐるものなるが故に、人間の精神の形式的有を形成する觀念は單純ではなくして甚だ多くの觀念から組織せられてゐる。又形體の受ける感觸の總ての樣式は、動かされた形體の性質と同時に動かす形體の性質から起る故に、人間の身體が外部の形體から受ける感觸の各樣式の觀念は、人間の身體の性質と同時に外部の形體の性質をも包含せねばならぬ。從て有機體の同一觀念の中にはそれの身體の感觸の觀念と外部の形體とが共働してゐると謂はねばならぬ。

スピノーザに於ては»corporis affectiones«と»rerum imagines«とは同一のものとせられる。かくしてスピノーザの云はんとするところは身體の感觸に伴ふ感覺を、それに依て現存すると看做すところの事物の中へ植ゑ込むと云ふことである。かく身體の感觸に機因せられて對象を設定し、それを主觀的規準に從て判定することの中に正しく表象は成立するのである。この吾々自身の狀態の外面化 (Externalization) は吾々の「感觸の觀念」であり、同時に又他の形體の像である。感性的表象とは、固、かゝるものに外ならぬのであり、從てそれは常に自己自身の中に直接的に對象存在の是認と證明とを含む延長的なるものとして理解せられねばならず、假令非妥當なる觀念であるとは云へ、本來觀念の中には誤謬の形式を形成する如何なる積極的なるものも存在せぬ故に、盲目的に受納せられるのではなくして、實的な知識としてそれ自身に於て觀察せられるならば何等の迷誤を包含するものでもない。却て延長性をそれの本質的特質とする感性的表象は、思惟と延長とを自己の中に結合することに依て認識の觀念的空虛性を救ひ、理性知をして思惟と延長との區別を確立し得ざる結果、總てを一樣的思惟の中に埋沒せしめる危險性から、直觀知をしては實體の本質に反して實體を純粹精神的なるものとして把捉せしめることの誤謬から免れしめる

ものである。かくして最低段階の精神は又最も基本的なる精神でなければならぬ。感性的表象の妥當なる認識に對するかゝる根本的制約性は前述せる認識に於ける身體性に照應するものに外ならぬであらう。然しながら、かゝる感性的表象は之を以て自然を理解するの具となすに由もない。人はそれに依て唯自然の書を讀むだけである。表象を法則と秩序とに於て理解するものは理性知であり、それの本質は普遍性である。然るに現實態は個別性、多樣性をそれの本質とするものなるが故に、理性知を差別相に於て再び理解するものが直觀知でなければならぬ。感性的表象は理性知と共に止揚せられて直觀知の契機となることに依て始めて個體把握の原理となることができる。

この際、然らば認識論のかゝる解釋はスピノーザ哲學の出發點たる反省的認識方法と如何にして調和しうるのであるかと問ふのは全く正當であり、之はスピノーザに於ける純粹知性と經驗的知識との矛盾であり、一の生得觀念からの絕對的演繹と汎神論的認識方法との矛盾に外ならぬ。併しこの困難も「人間の精神はそれに依て自身及その身體並に外部の形體を現實に存在するものとして知覺するところの觀念を有する。それ故に、精神は神の永遠無限なる本質の妥當なる認識を有する。」と

語られるとき克服せられうるかにみえる。かくして又「吾々は永遠であることを感じ又經驗する。何となれば精神はそれが悟性に依て理解せられるものを記憶の中にあるものと同樣に感ずる故である。卽ち物をみ、又觀察する精神の目がその證左である。」と述べられるとき、人はスピノーザの認識論を以て唯理論的思辨的であると考ふべきではない。それは疑ひもなく感性的として特徵附けられ、現實態をそれの生ける聯關の中に於て把握せんとするものである。身體性はスピノーザに於ては惡と虛僞との原因であると同時に、それは又常に善と眞理との原因であることが忘れられてはならぬ。

如上の方法論的、認識論的理解は進でスピノーザに於て常に形而上學的困難として殘らざるを得ないところの思惟と延長との統一、それの人間學的相關の問題へと吾々を押し入れるであらう。スピノーザは身心關係の問題を形而上學的に屬性論一般の立場から解かんとして、却て如何なる辯疏も之を救ひ得ないであらう如き困難を曝露しつゝも、今や立場の全き轉倒に依て、感性の眞理性に於て身心の具體的統一を闡明し、それを以て屬性問題解決の道をも指示するかにみえる。感性の眞理は物質の眞理であり、肉體をもてる人間の眞理性である。スピノーザが「人間の精神を

形成する觀念の對象は身體或は延長の現實的に存在する或る樣態であつて他の何物でもない。」「それから、人間は精神と身體からなること及人間の身體は吾々がそれを感ずる通りに存在することが從て來る。」「これに依て、吾々は人間の精神が身體と結合せることのみならず、又精神と身體との結合のもとに何を理解すべきかを認識する。」(去)と述べるとき、その眞意は人間が思惟的觀念性と延長的物質性との統一の基礎として把握せられる限り理解し得られるであらう。人間に於て»corporis«と»idea corporis«とは一致し、物質的なるものと精神的なるものとの實存的統一が得られる。かくしてのみ眞實に「身體の觀念と身體卽ち精神と身體とは或る時は思惟の屬性のもとで、或る時は延長の屬性のもとで理解せられたところの同一の個體である。」(去)と語られるのであり、人間の中に於て平行二屬性の統一の問題は自らを止揚する。スピノーザが「エティカ」第二部、公理二に於て述べる»homo cogitat«なる命題もその眞理性はかくの如きものでなければならず、人はそこに主觀的、觀念論的歪曲をみるべき何等の餘地をも發見し得ぬであらう。卽ちそこでは思惟するものは自意識でも概念でもなく、»ego«に非ずして»homo«であること、換言すれば思惟と存在との眞の統一の主體は感性的、現實的なる人間であることが指示せられる。思惟はかくしてス

ピノーザに於ては「それ自らのための主辭」即ち個人の肉體とは獨立なる存在たり得ず、常に感性的人間に依據する。人間がスピノーザ哲學の眞實であり、出發點であり、自我や觀念ではなく現實的、物質的なる人間が實體の Wahrheit である。

かく觀じ來るならば、最早スピノーザに於ては可變的個物の自然界の、幾何學的論勢の永遠界に於ける解消、貶黜等は語らるべきではないであらう。自然は唯、物質的、現實的人間定在を通ずることに依てのみ把握せられるところの現實態となり、變化の無限の豐かさを許容しつゝも、而も全體的自己本來の姿を變ずることなく、却て生滅變化を通じて自己を維持顯揚する辯證法的自然とならねばならぬ。

固、natura naturans, natura naturata なるスコラ的術語は、神の兩側面の辯證法的、形而上學的聯關を表示する語として通用し、スピノーザも亦之を辯護的に使用したと謂はれる。[29] 今かゝる論議の眞僞は別とするも、スピノーザの自然觀を單に十七世紀哲學者一般に通用的なる力學的、機械論的自然觀を以て一義的に律しようとするのは誤謬であると謂はねばならぬ。若し「エティカ」の副表題 »ordine geometrico demonstrata« が標榜するが如く、有限的悟性の形式的自同性のみがスピノーザの立場に外ならぬとすれば、人は精々 natura naturata の範圍に止まり得ても natura naturans を理解するに由

もないであらう。スピノーザの掲ぐる自因の概念は既にかゝる形式的同一性の框を破つて辯證法的性格を要請し、體系の到る處に見出される全體性の思想は、所謂ヘーゲルの自然觀察を超えて自然把握へと吾々を導くものである。スピノーザに據れば natura naturans の活動的本質は能動的力 (wirkende Naturkraft) として把握せられ、natura naturata に對して究極的根源性を維持し、絶對的運動をそれの基礎に有する。natura naturans が natura naturata に對してかくの如き根源性を維持することに依てのみ兩者は辯證法的たりうるのであり、かゝる辯證法的聯關に依てのみ又 natura naturata はそれ自身の中に辯證法的性格を荷ひうるのである。かくしてのみ人は正當に「有限なる事物の容器 (receptacle) として設定せられた樣態の範疇に於て、或るものが如何にして無限でありうるか」との問ひに答へうるのであり、スピノーザ自身「物は二樣の仕方で吾々に現實として考へられる」と云ふことの意味を理解することができ、個體的本質と存在との辯證法的關係、個物に於ける「二重因果」の滲透貫通等をも理解することができるであらう。スピノーザはオルデンブルグ宛の書簡に於て謂ふ。「總ての形體は他の形體に依て圍繞され或る一定の仕方に於て存在し活動すべく相互的に規定せられる。と同時に運動と靜止との關係は宇宙全體に於ては常に同一のも

のとして止まつてゐる。かくして各々の形體は一定の樣態に依て變容されたものとして存在する限り、全宇宙の一部分として觀察されねばならず、又それはその全體と一致の中にあり、他の諸部分とは聯關に於てあると云ふことが生ずる。宇宙の性質は血の性質の如く制限されたものではなくて絶對に無限であるから、この無限なる力の性質に由て宇宙の諸部分は無限の樣態の中に變容せられ無限の變化を受けねばならぬ。而して私の考に依れば、實體に關しては個々の部分は全體とより密接なる結合を有する。……　實體が無限であると云ふことは實體の本性に屬するものである故に、そこから實體の本性には有體的實體の各部分が歸屬し、實體はこれらの部分なしには存在することも理解せられることもできぬと云ふことが從て來る。(二)」人はこゝに運動と靜止、全體と部分、無限と有限及部分相互の聯關の卓拔なる自然辯證法的把握を讀みとりうるであらう。「個物とはその種類に於て有限なるものである。それは同一性質の他のものに依て制限せられうる。(三)」制限は存在の部分的否定に外ならぬ。卽ち有限なる個物は凡て自己の中に自己の有の否定を含んでゐると謂はねばならぬ。「その他に現存する個物の間で力及强さに於て他から凌駕されない個物は自然の中にはない。寧ろ如何なる個物が與へられても、その與へられ

たものを破壞しうる他の一層有力なるものが常に現存する。」[三] かくして「總ての個物は偶然的であり、消滅的であり、」有限で、限定された持續(duratio)が個物の現在的、現實的存在(praesens actualis existentia)の表徵となる。然し乍ら有限なるものは單に有限なのではなく、個物の被限定性は本質の絕對缺如ではあり得ない。本質こそ存在に於ける積極的なるものであり、如何なる有限的偶然存在と雖も自己固有の本質を含まねばならぬ。かゝる本質の他の個物の本質に依て制限されたる不完全なる實現が個物の有限的、偶然的存在に外ならぬのである。かくの如くして個物の本質は夫々交互に制限し合ふことに依り、交互作用の共同態を形成し、本質は、固、力なるが故に力學的相互聯關の中に入る。然るに存在するものゝ一切は自然の中にあり、之に依て理解せられねばならぬのであるから、個物のかゝる本質は又根源的自然力を卽ち natura naturans を能動因として之に由來しなければならぬであらう。而してこの際、本質の存在性の部分的否定たる個物の有限的本質がかゝる超越的、根源的自然力に起因すると云はれるのは、兩者の關係が非連續的であり、飛躍的であるからに外ならず、これは、固、natura naturans と natura naturata とが辯證法的統一に於てあるからに外ならぬであらう。個體的有限存在は、かくの如くして自己の中に自己の有の否定と同時

に自己の有の絶對的肯定をも含むことに依て、それ自身辯證法的統一に於て理解せられねばならず、かくしてのみ人は又スピノーザの區別する個別的有限樣態と無限樣態との辯證法的關係をも理解しうるであらう。因果性と交互作用とは辯證法的運動の二つの契機として把握せられることに依り、全自然を流動化する原理となる。併し自己原因として卽而對自的に何物に依ても決定されざる全體的自然は、自己の中にかゝる無限の運動と分裂を含みつゝ而もそれに依て全體の統一を擾さるゝことなく、却て之を包む如きものでなければならぬ。スピノーザに於ける自然は、固、その全體性に於てかゝる內包的全體として把握されねばならぬであらう。

かゝる自然は、その全體性に於て、最早スピノーザ哲學の端初に立つが如き相對的存在に先立ち直接に存在する神祕的、無媒介的全體と云へる如きものではなくして、感性に依て媒介されたる自然であり、それは感性的、精神的全體性に於ける生きた人間定在を通過することに依て始めて獲得せられうる唯一の自然に外ならぬ。かゝる自然にして始めて人間に對して感性的にその生活の基礎並に對象としてあらはれうるであらう。

（一）Ethik: I. Lehrsatz 29, Anmerkung.

（二）Ethik: I. Lehrsatz 23.

（三）『スピノザとイーケル』目黒元博士論文、一〇四、一〇五頁。參照

（四）Ethik: I. Lehrsatz 28. II. Lehrsatz 29, Folgesatz; 30, Beweis.

（五）Ethik: II. Definition 3; Erläuterung.

（六）Ethik: I. Lehrsatz 15, Anmerkung. Epistel, 83.

（七）Scheler: Philosophische Weltanschauung, S. 133.

（八）Ethik: IV. Lehrsatz 26; 26, Beweis. III. Lehrsatz 7.

（九）Ethik: II. Lehrsatz 13, Anmerkung. III. Allgemeine Definition der Affekte. Martineau: A Study of Spinoza, p. 220.

（十）Ethik: II. Lehrsatz 13; 19; 23; 26.

（十一）Ethik: II. Lehrsatz 13, Anmerkung. Martineau: A Study of Spinoza, p. 134; 213.

（十二）Ethik: II. Lehrsatz 17, Folgesatz, Beweis.

（十三）Ethik: II. Lehrsatz 17, Anmerkung.

（十四）Ethik: V. Lehrsatz 23, Anmerkung; 29; 31.

（十五）Ethik: II. Lehrsatz 40, Anmerkung, 1; Robinson: Kommentar, S. 347.

（十六）Ethik: II. Lehrsatz 47, Beweis.

（十七）Ethik: V. Lehrsatz 23, Anmerkung.

（十八）Ethik: II. Lehrsatz 13; 13, Folgesatz; 13, Anmerkung.

（十九）Ethik: II. Lehrsatz 21, Anmerkung.

（二〇）Ueber die Entstehung d. Termini n. naturans u. n. naturata, von H. Siebeck——Archiv d. Geschichte d. Philosophie. Bd. III.

(二一) Epistel, 3².
(二二) Ethik: I. Definition 2.
(二三) Ethik: IV. Axiom.

五

人間の基底としての、それなくしては人間の存在も本質も考へ得ない自然の中にあつては、人間は「王國中の王國」imperium in imperio の如きものではあり得ない。人間は自然の一部分、一肢體として他の自然物と同樣に自然の一般的法則に從はねばならぬ。それ故 »Kosmologie« と »Ethik« とはスピノーザに於ては何等の矛盾するものでもない。併しこのことは人間を單に自然物と看做すことを意味しないであらう。かゝる觀方は人間と自然との間の限りなき連續性、同一性の觀點を立場とするものとしてスピノーザに於ては卻けられねばならず、却て宇宙論と云ひ認識論と云ふも、倫理學的世界觀 (ethische Weltanschauung) のための手段であり準備であり、「學のための學」が排斥せられて、學は單に人間的完全性のための豫備的條件であるとせられるところにスピノーザの特色ある思想が認められねばならぬ。»Ethik« はスピノーザに於ては實踐の道義論的研究や規範學ではなく、正しく「アントロポロギー」と呼ば

れねばならぬ。「然しながら人間の力は非常に制限されて居り、外的原因の力に依て無限に凌駕される。それ故に吾々は外部にある物を吾々の使用に向ける絶對の力をもつてゐない。けれども若し、吾々が自分の爲すべきことをなしたこと、吾々の有する力は不運を避ける位置へ吾々を移すに足りないこと、又吾々は單に自然の一部分であつて、その秩序に吾々が從てゐることを意識するならば、吾々は自身に有要なる物を考慮することから生ずる要求に反するものに遭遇してもそれを平氣で堪へるであらう。若し吾々がこのことを明白且分明に洞察するならば、認識に依て定義される吾々の部分卽ち吾々の一層優れた部分は全くそれに滿足し且この滿足を固執することに努めるであらう。㊀」「運命の二樣の面影を泰然として待ち且之にたへうる」かゝる認識論的諦念は、自然との鬪爭ではなくして自然との和解である。スピノチスムスをして凡ゆる他の合理主義より區別せしめるものこそ又かゝるものに外ならぬであらう。㊁併しスピノーザに於て'Resignation'は'Verzweiflung'ではなく、諦念は「アキラメ」と訓ぜらるべきでない。人間は自然に於ける自己の位置の正しき認識より生ずるかゝる宥和を通じて却て自然に働きかける。それ故にかゝる認識論的諦念はアグノスティチスムスを引導せぬかとの危惧も又直に廢棄されるであらう。

縱し、それは常に對象的活動として把握せられなかつたとは云へ、スピノーザ的實踐の立場に於てはかゝるアグノスティチスムスは止揚せられて對象の、現實性の主體的把握が宣揚せられねばならぬ。實踐的態度こそスピノーザの全思想を貫く赤い絲である。

今や飜つてこの論述の全道程を顧るならば、人はそこに神性の問題より人間性の問題への、萬有に於ける神の內在の思想より基礎的自然に於ける人間理解への自らなる推移の過程をみるであらう。而してこの推移の過程に身を措くことに依てのみ、スピノーザ哲學に於ける這般の諸問題もそれの固有なる地盤をうると共に解決への道を指示せられうるであらう。

人はかくして謂ふことができる。スピノーザの哲學はそれ自身觀念論でも唯物論でもなく、それはテオロギーよりアントロポロギーへの轉移の要請であり、その矛盾に於て把握せられたるスピノチスムスは、それの「生けるもの」を近代唯物論の世界觀の中に見出すものであると。（一九三二年十一月二十四日、スピノーザ生誕三百年記念の日に。）

（一）Ethik: IV. Anhang, 32.

（二）Gebhardt: Spinoza, Einleitung.